

Title	中国語のモダリティ機能の連続性 : “想”と“吧”を中心に
Author(s)	黄, 琬婷
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54318
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	黄琬婷
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 23903 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	中国語のモダリティ機能の連続性—“想”と“吧”を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 岩根 久 (副査) 教授 春木 仁孝 准教授 難波 康治

論文内容の要旨

本博士論文の目的は中国語の動詞“想(xiǎng)”と文末語気助詞“吧(ba)”を分析対象として、中国語のモダリティ機能の連続性を考察することである。

本論文はモダリティを話し手の命題内容に対する判断、態度を表す意味・機能の概念と規定する。従来日本語のモダリティはその機能によって大きく二つの種類に分けられている(仁田1991、益岡2007等)。一つは命題内容に対する話し手の判断の捉え方を表すもの(M1と称される¹⁾)であり、もう一つは聞き手に対する命題内容の伝達の仕方を表すもの(M2と称される)である。この分類の仕方は近年中国語のモダリティ研究においても見られる。中国語のモダリティ研究においては、言語学及び英語学の影響を受け、従来M1に関する研究が中心であったが、1990年代以降、中国語の分析に基づきモダリティの体系的研究が行われるようになり、近年ではM2に関する視点も取り入れられているようになった(贺阳1992、齐沪扬2002等)。現在、中国語のモダリティ研究においては、日本語のモダリティの両機能(M1とM2)に相当する二つの異なる機能の区別が立てられている。M1機能の代表的な表現には助動詞(“能(néng)”、“会(huì)”等)が挙げられ、M2機能の代表的な表現には語気助詞(“呢(ne)”、“吧(ba)”等)が挙げられる。

一方、近年M1とM2両機能間には明確な境界が存在しないという主張もある(仁田1992、陶红印2003、湯本2004等)。これらの研究においては、従来別々のものとして取り扱われてきたM1とM2が拡張関係によって互いに関連、あるいは連続していることが主張されている。また、両機能の拡張関係に関しては、「M1からM2へ」と転移していくと主張するもの(湯本2004等)と、「M2からM1へ」と拡張する可能性を示すもの(蓮沼1995)もある。こうした視点は多様なモダリティ機能を解釈する際に一つの手掛かりを提示しているといえる。

本論文は上記の視点を採用し、中国語のモダリティの両機能を個別のものではなく、意味的・機能的に関連する、一つのカテゴリーとして捉えることが必要だと考える。モダリティ機能の拡張の方向性に関しては、その機能により「M1からM2へ」、「M2からM1へ」という二つの方向性が観察されるが、本論文では「M1からM2へ」という方向性が見られた“想”と“吧”を対象を絞って検討した。

こうした中国語のモダリティ機能の連続性を考察するために、動詞“想(xiǎng)”と文末語気助詞“吧(ba)”を取り上げた。従来、“想”や“吧”は複数の機能を有すると考えられ、それらを統合的に説明することは困

論文審査の結果の要旨

黄琬婷氏の学位請求論文「中国語のモダリティ機能の連続性—“想(xiǎng)”と“吧(ba)”を中心に—」は、英語および日本語のモダリティ研究をも視野に入れた上で、中国語の動詞「想(xiǎng)」および助詞「吧(ba)」のモダリティ機能の分析を通して、中国語におけるモダリティ研究に新しい視点を導入する斬新で意欲的な論文である。

中国語のモダリティ研究は、おもに助動詞がその機能を担う「命題内容に対する話し手の判断の捉え方を表すモダリティ」(M1と略記)を中心として始まり、さらには主に語気助詞がその機能を担う「聞き手に対する命題内容の伝達の仕方を表すモダリティ」(M2と略記)へと研究が展開されているが、黄琬婷氏は動詞「想」およびいわゆる語気助詞「吧」がM1、M2両者のモダリティ機能を持つことを明確にすることによって従来のモダリティ研究の枠組みを拡張し、さらに認知言語学的視点から、「想」および「吧」のスキーマにおいてM1からM2へと意味機能が拡張されていくと主張している。

「想」の分析においては、直接経験に基づく判断を表す「觉得」との対比から、「想」が間接情報に基づく判断を表すことを示した上で、「想」の意味機能が動詞本来の「自分の意見表示」から「間接判断」(M1)を経て「聞き手への配慮」(M2)へと拡張されるとし、「吧」の分析においては、その意味機能がプロトタイプの「推量」(M1)から、順に「推量確認」(M2)、「認識確認」(M2)、「促し」(M2)へ拡張されるとする。

「想」と「吧」という2つの語を中心とした分析ではあるが、M1とM2両者の機能を持つ動詞と語気助詞に着眼した点、またそれらを具体的に豊富な例を用いて綿密に分析し、説得力のある結論を導いた点は、この論文の優れた特質である。審査の過程で、論の展開方法として先行研究をより批判的に扱った方が良かったという指摘や、人間の認知という観点からM1からM2への拡張がなぜ起こるのかさらに考察を深めて欲しかったという指摘がなされた。しかしながら、この論文の持つ広い射程と中国語のモダリティ研究への貢献という観点から、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として十分価値のあるものと認める。

難であると考えられている。本論文では“想”と“吧”の分析を通して、一つの語がM1とM2という二つの機能の性格を持つという機能の交錯の現象があることを示し、それは“想”や“吧”の持つモダリティ機能の連続性によるものだということを主張した。

さらに、本論文では、機能拡張に基づく連続性の指摘だけでなく、モダリティの機能の分析に際して「スキーマ(schema)」²という概念を導入した。それにより、複数の機能に共通する抽象的な概念を抽出することができ、複数の機能の相互関係をさらに明確に表すことができると考える。拡張関係は複数の機能間の横の関係を示すものであるのに対して、スキーマ関係は複数の機能とその上位概念であるスキーマとの上下関係を示すものである。拡張関係とスキーマ関係の両方を明確にすることによって、一つの語が有するカテゴリー全体を総合的に捉えることができる。

本論文は中国語モダリティ機能の分類の仕方を検討し、従来説明できなかったモダリティ機能の関係を包括的に説明する試みである。同時に、本論文は中国語のモダリティの機能体系を見直す際に必要となる枠組みを提示することを目指した。

第1章から第5章までの概要は以下の通りである。

第1章では、英語学、日本語学、中国語学におけるこれまでのモダリティ定義と表現に関する論述を概観した上で、その問題点を指摘した。日本語と中国語のモダリティ研究においては、モダリティ機能はその性質によって明確にM1とM2に分類されている。しかし、M1あるいはM2と定める基準設定が不明確であること、また、このような分類の仕方はモダリティ機能の多様性に反していることを指摘した。

第2章では、中国語のモダリティ研究の現状に関して、動詞“想”と文末語気助詞“吧”を取り上げ、モダリティのM1とM2両機能の明確な区別が困難であることを指摘した。この問題の解決策に当たって、モダリティの両機能間には明確な境界が存在せず、相互に関連性を持っているという連続性の視点からの分析が重要であることを示した。そして、中国語のモダリティに関して、「M1からM2へ」という機能拡張の連続性を証明することを本論文の研究課題として提示した。

第3章は動詞“想”、第4章では文末語気助詞“吧”を取り上げ、それらの持つ複数の機能間の関連性について議論し、「M1からM2へ」の連続性を証明した。

第3章では、まず“想”と同様に話し手の判断を表す動詞“觉得”と比較することで、M1機能としての“想”が「間接判断」であることを明らかにした。そして、“想”が持つM2の伝達機能を「聞き手への配慮」とし、その機能はM1の“想”からの拡張であることを明確にした。その結果、“想”のモダリティ機能の拡張プロセスは「間接判断」から「聞き手への配慮」へ転移するということが明らかになった。つまり、“想”のM2機能(「聞き手への配慮」)は、M1機能(「間接判断」)から意味拡張されたものであり、そのモダリティの機能拡張の方向性は「M1からM2へ」と移っていくものであることを明示した。

第4章では、従来の諸研究を踏まえ、文末語気助詞“吧”には「推量」、「確認要求」、「促し」という三つの機能があることを確認し、「確認要求」の“吧”はその確認の性質によって、さらに「推量確認」と「認識確認」に分けた。また、「推量」を“吧”のプロトタイプの機能と規定した上で、「推量確認」と「認識確認」及び「促し」がそこから拡張した機能であると分析した。その結果、“吧”の機能拡張のプロセスは「推量」(M1)から「推量確認」(M2)へ転移し、引き続いて「認識確認」(M2)へ転移して、最終的に「促し」(M2)となるように、一つの連続体をなしていることが明確になった。

第5章では、“想”と“吧”各々についてその複数の機能に共通するスキーマについて議論した。その結果、“想”には「間接判断」と「聞き手への配慮」に共通する意味として「断定保留」というスキーマを抽出し、“吧”には「推量」、「推量確認」、「認識確認」、「促し」に共通する意味として、「ある事態が起こる蓋然性が高い」というスキーマを抽出した。“想”と“吧”各機能全体に共通するスキーマを論じることによって、両者の各カテゴリー全体における機能の相互関係をさらに明確に表すことが可能になった。

第6章は各章のまとめ及び今後の課題について述べた。

¹益岡(2007)による。

²スキーマとはカテゴリーのすべてのメンバーあるいは一部のメンバーに共通の抽象的な意味を表す。これについては、Langacker(1987)を参照。